（別紙２）

審査の結果の要旨

氏　名　亀田 真澄

本論文は、ユーゴスラヴィア（以下ユーゴと略称する）の第一次五カ年計画（1947～51 年）と、ソ連の第一次五カ年計画（1928～32 年）・第二次五カ年計画（1933～37 年）におけるプロパガンダを、主として映画、写真、グラフ雑誌などの分野について比較研究したものである。

全体は６章と結論から構成されている。

第１章は、先行研究の概観を行うとともに、メディア理論やパフォーマンス理論に基づいた分析の枠組みを提示する。第２章は、革命直後のソ連の演劇と祝祭パレードを取り上げ、そこで俳優と観衆が同じ存在論的次元にいる感覚が強調されていたことに焦点を合わせて分析を行う。第３章は、ユーゴにおけるソ連文化の受容過程に着目し、プロパガンダに携わったユーゴの芸術家や作家の多くがソ連文化の影響を強く受けていたことを確認する。第４章から第６章は、ソ連とユーゴの五カ年計画プロパガンダを、記録映画、写真、グラフ雑誌という三つの異なったジャンルにおいて具体的な事例に即して比較・分析したもので、本論文の核心部分となる。

このような国際的にも類例のあまりない優れた着眼点から行われた調査・分析の結果、ユーゴにおけるプロパガンダは、ソ連から単に押しつけられたものでもなければ、ソ連を模倣したミニチュア版でもなく、国民的アイデンティティ創出のためにユーゴの社会状況に応じて独自に改変されたものだということが明らかにされた。著者はそれを「アダプテーション」として説明できるという斬新な視点を打ち出している。さらに特筆すべき論点と言えるのは、ソ連のメディア・イメージでは「現前性」が前景化されていたのに対して、ユーゴにおいてアダプテーションが行われた際には「媒介性」を強調する傾向が強かったという指摘である（「現前性」と「媒介性」はこの論文のキーワードであり、著者によれば、「現前性の表現」とは、メディア・イメージが鑑賞者の「いま・ここ」に生起しているかのように描いたもの、「媒介性の表現」とは描かれたものと鑑賞者が物理的媒体によって結ばれていることを前景化した表現である）。この見方は、ソ連・東欧をイデオロギー的に一枚岩の文化圏として一般化せずに、「複数の共産主義文化」という視点から研究することを具体的に可能にしており、理論的な貢献としても大きな意義を持つ。

ユーゴ以外の東欧諸国やナチス・ドイツとの比較、同時代の西欧の影響、プロパガンダとジェンダーの関係など、残された重要な課題も少なくないが、それは論文の限界と言うよりは、むしろ研究テーマの潜在的に大きな射程と今後のさらなる展開の可能性を示すものである。本論文はロシア語とセルビア・クロアチア語の一次資料を博捜するとともに、現代欧米のメディア論を活用した分析にも重点を置き、実証と理論の両面から説得力のある結論を導き出しており、創見に富んだ学術成果として高く評価できる。それゆえ、審査委員会は本論文が博士（文学）の学位を授与するにふさわしいとの結論に至った。